

AKBP-Forum2016に参加して

柴田育子

2016年4月11日～17日まで、ベルリンで開催されたドイツ外務省フォーラム“*Welt-Klasse! Schule. Bildung. Zukunft.*“に、日本のドイツ語生徒新聞“*JAPAN Heute*“の編集チームが招待され、私も引率教員として参加させていただきました。このフォーラムは、2008年にPASCHプログラムを立ち上げた、フランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー外相とドイツ外務省が主催するもので、世界中のPASCH関係者（学校長・PASCH校生・PASCH校ドイツ語教員）400名が参加する大規模なものでした。ベルリンのテーゲル空港から乗り込んだバスでは、インド・ブラジルのPASCH校関係者と一緒でしたし、PASCHネットのレポーターチームではドイツのゲミュンデンのフリードリヒ・リスト・ギムナジウムの生徒たち、ハンガリーのペーチの Babits Mihály Gymnasium (Pécs) PASCH校生と同じ Social-Media チームに所属し、滞在中にはフランスのランスのジャン・ジョレス高等学校(Lycée Jean Jaurès in Reims)の先生や生徒たちと大変親しくなりました。このようなさまざまな国の人たちとPASCH校の共通言語であるドイツ語を通じて国際交流できることに大きな喜びと幸福感を感じました。

一方、今回、引率教員としてベルリンに滞在して感じたことがいくつかあります。それは前々からPASCHに関わっていく中で私自身が感じていたことでもありました。一つは低学年から行う第二外国語教育の重要性です。EUでは周知のように「2+1の言語教育」が推奨されており、母語と英語に加えてもう一つの外国語を習得することが当然のことと考えられています。

翻って日本ではどうでしょうか。第二外国語は、「大学に入学後学習を始め、1～2年学んで十分に習得することなく終わるもの」、と多くの場合考えられているように思います。中等教育レベルで第二外国語を学習することは日本では極めて希なことです。今回、話をしたPASCH校生たちの多くは、14～16歳でした。これはドイツ語教員として大変うらやましいことでした。

もう一つ、親しくさせていただいたランスのジャン・ジョレス高等学校からの参加者から、フランスのPASCH校には、ドイツのアビトゥーアとフランスのバカロレアを同時に取得できるプログラムがあることを知りました。ドイツとフランスとが、過去の歴史的対決を乗り越えて、すべての中等教育機関が相互に協定校を持ち、定期的に交流を行っているという話は以前から聞いていました。アビトゥーアとバカロレアを同時に取得すると、ドイツの大学でもフランスの大学でも将来学ぶことができます。高校卒業時

に、ドイツ語とフランス語の高度な運用能力を持つことができるのは、たいへん素晴らしく、またうらやましいことに思えました。

今回の引率では、どちらかと言えば、海外の PASCH 校のドイツ語レベルの高さに驚かされることばかりでしたが、ベルリンというドイツの歴史的舞台となってきた都市を生徒たちと共に見学できたことは大変意義深いことでした。また PASCH というドイツ語を通じたネットワークは、まさに世界的な規模のものであることも改めて実感し、この協定校であることにありがたみを感じました。このような機会を与えてくださったゲーテ・インスティトゥートおよびドイツ外務省関係者の方に、心よりお礼申し上げます。